

神前結婚式

夫婦の契を交す結婚式。現在では神前式、人前式、チャペル式など多様化していますが、優雅な雅楽が奏でる古式ゆかしい神前結婚式は、いつ参列しても厳肅な雰囲気です。日本のポピュラーな結婚式スタイルである「神前結婚式」にはどんな由来、意義がたくされているのでしょうか。

◆神前結婚式とは何でしょう

神前式とは神々にふたりの結婚を報告する儀式です。結婚式場によって奉られている神も異なりますが、一般的なのは夫婦円満の神様、天照大神(あまてらすおおみのかみ)の親とされている「いざな岐(男)いざな美(女)」が多いようです。

◆神前結婚式はいつごろから始まったのでしょうか

今日のような神前式が始まったのは、明治33年に大正天皇のご成婚を記念して日比谷大神宮(現大東京神宮)で行った結婚式からと言われています。結婚式の源流はというと、もっと古く室町時代の武家の結婚式までさかのぼります。室町時代には陰と陽の二つの式で構成されており、まず陰の式では花嫁は花婿の家へ行き、そこで合杯の礼をしました。式に参列するのは花嫁とその付添人、花婿、式をつかさどる人だけで、花嫁は白無地の着物を着用。三日後の陽の式では一転して色物のあでやかな姿で式に臨み、そのあと親族固めの杯を交して式は終わるというものでした。

◆神前結婚式の様式について

■玉串奉奠(たまぐしほうてん)

玉串とは榊の小枝こ四手(しで)をつけたもので、人の意と神をつなぐ渡し役とも言われています。

■雅楽

平安時代、朝廷や貴族社会で行われた式楽。催馬楽(さいまらく)・東遊(あずまあそび)に合わせ管弦楽と管楽器、打楽器の伴奏による演舞の舞楽とを総称したものです。

■三々九度の杯

お神酒を一つの器で共飲することにより一生苦勞を共にするという誓いを意味しています。古代の婚礼には、嫁になる人が婿になる人に対して、盃を捧げることが重要な儀式的中心になっていたようです。三々九度の起源とも言われている応神天皇の物語があります。応神天皇が山城の国であった美女に、その名を尋ね彼女は矢河枝比売と答えたため、(名前を答えるというのは求

婚に応じる意)天皇が翌日その家へ行ってみると、彼女の父は娘に天皇に仕えるように諭し、彼女のご馳走を用意し天皇に御盃を捧げ、天皇は歌を歌われたという話です。つまり、これが後の三々九度の杯のはじまりと言われています。

■浦安の舞について

故昭和天皇が皇暦二千六百年を記念して世界の平安、平和を祈られて歌われ、多忠朝(おおのただとも)が創舞・作曲しました。詩は、天地の神にぞ祈る朝風(あさなぎ)の如く波立たぬ世を。

◆神前結婚式の一般的な式次第

(式場によって多少順序が異なります。)

1. 入場

係員の先導に従ってまず、新郎、新婦、媒酌人、媒酌人婦人、新郎両親、新婦両親、続いて新郎側親族、新婦側親族の順で入場。

2. 修祓(しゅうふつ)の儀

神事に従う前に身を清めるおはらいのことです。

3. 齊主一拝

式を始めることを神様に挨拶。

4. 父から仲人へ結納品の引渡し

結納目録・金子をわたす

5. 三献の儀

三三九度とも呼ぶ結婚を誓う杯事。三方に三つ重ねの杯がのっています。一番上の小の杯で新郎から新婦、中の杯は新婦から新郎、大の杯は新郎から新婦と、1人が1つの杯を3回に分けて3杯を飲みます。

6. 誓詞奉呈

新郎・新婦は並んで神前に向い新郎が誓詞を読みあげ、姓名をいいます。新婦も最後に名前を言い誓います。

7. 指輪交換

8. 玉串奉奠(たまぐしほうてん)

玉串を玉串案に捧げた後、二、三步退き二拝二拍手一拝し、2人は向き合うように回って席につきます。

9. 親族固めの杯

10. 齊主一拝

式が終わりましたと神様に挨拶。

11. 一同退場

神前結婚式Q & A

Q. 三々九度の酒は必ず飲み干さなくてはいけない？

A. お神酒(みき)は最初のニロは口をつける程度にして、三口目でいただくようにします。全部飲み干す必要はありません。あくまでもお互いの口をつけることが大切なため、無理をして飲まなくてもいいのです。